

棚尾地区まちづくり事業

平成26年2月19日（水）19時～

棚尾公民館3階

## 第32回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など  
青年団、鑄物業、達吉のふるさと歌など

2 テーマ56「五代永坂空兵衛と和歌」

(1) 説明（杉浦光雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

4 次回日程

第33回3月19日（水）午後 7時から「矢作川と八村川」「棚尾の農業用水」

史跡巡り4月 3日（木）午前10時から 八柱神社集合

第34回4月16日（水）午後 7時から「本村沿革記録」

## 「五代永坂杵兵衛正勝と和歌」

### 1 五代永坂杵兵衛正勝

永坂正勝は弘化4年（1847）生れで、父は嘉平治（四代杵兵衛）母はやすといた。正勝は若い時から剣術・漢学・書道・和歌・茶道を学んでいる。それでは一つずつ見ていこう。

時代の趨勢<sup>すうせい</sup>か、正勝は剣術に熱中している。剣術の師は西尾藩士の田代辰雄（西尾藩士田代益<sup>すすむ</sup>の養子、廃藩置県後養蚕家、蚕種家として名を残す）、清水勇で、目録を受領している。また、明治4年（1871）に大浜騒動がおきたとき、陣屋の遠藤大属<sup>とおいさかみ</sup>（甚八郎、慶応3年代官として赴任）に従って赤禿に出陣し、後日褒賞として2千疋下賜されている。

漢学を学ぶことは当時としては当たり前で、正勝も高橋祐雄（重原藩士、権大参事、廃藩置県後郡役所で郡誌編纂にあたる。）について学んでいる。明治14年（1881）の内国産業博覧会には、「大棧瓦」を作成し、その表面に瓦産業についての「作瓦説」と題する漢文を彫刻している。書道は大浜村の磯貝天錫<sup>てんせき</sup>（磯貝安左衛門、薬種商、文人としても有名）に学んでいる。前述の「作瓦説」の原文が残っており、西山墓地の永坂家墓碑銘に正勝の書をしのぶことができる。

ここで特筆される和歌の経歴についてふれておこう。棚尾村字東浦東正寺の石川賢瑞は若いころ京都に遊学し、歌人香川景柄<sup>かげもと</sup>の門に入り、のち景樹・景嗣に師事している。帰郷後は砂長社を結成し和歌を広めた。正勝はこの賢瑞から指導を受けている。茶道もこういう交流のなかで行われたものである。正勝が景嗣の門に入ったのも賢瑞の紹介である。ただし、景嗣は慶応元年（1865）に亡くなっているので指導を受けた期間は短い。

正勝の妻は名古屋から来た人で八重といた。明治18年（1885）正勝の父嘉平治が重病になったとき誠心誠意看病を尽した。長男の茂三郎（六代杵兵衛）も京都から急遽帰郷していたが、その茂三郎も熱病にかかってしまった。そして、看病を尽していた八重も病に倒れ、8月1日亡くなった。また、嘉平治もその年12月18日この世を去った。正勝が信仰心を深めていくのは、これらのことがきっかけとなったに違いない。

明治21年（1888）発行の「参陽商工便覧」に「瓦製造処永坂杵兵衛」の絵がの

っているが、そのなかに「藤沢山清浄光寺再築課造瓦所」という看板が見える。これは永坂家にとって大事業であったろう。正勝と父の期待を担った長男茂三郎の活躍がしのばれる。

正勝は村の役職などをへて明治28年（1895）村長に就任した。正勝は長男茂三郎に期待するところ大で、実質的な経営を任せていく。正勝は昭和を迎えてまもなくの3年天寿を全うしている。

注1 砂長社

暖洲、秀楷、欽敏、篤親、宜民、季長、義賢、賢立、士功、猷、幸保、柳子の計12名からなる和歌の結社。指導者は景嗣。

注2 香川景柄（かげもと）

延享2年（1745）～文政4年（1821）。文化8年（1811）剃髪して黄中と称した。弟子の景樹（かげき）明和5年（1768）～天保14年（1843）に期待したが、景樹は一派を興し独立した。

忘れても 過にし物を とはれつる ゆふべに似たる 庭の松風 黄中  
ことの葉の しげき林に 咲きいでゝ わづかに匂ふ 花かこの花 景樹

注3 香川景嗣（かげつぐ）

寛政4年（1792）～慶応元年（1865）初名は景禮。景樹独立後、香川家を継ぐ。

初しもの をかへのま葛 うら枯て うらみやしかの 音に残るらむ 景嗣

注4 香川景信（かげのぶ）

京都から東京へ出て、司法省勤務。

## 2 正勝和歌集

### 《春部》

- 1 昨日まで つぼめる花も 今朝みれば 咲染にけり 宿の桜木
- 2 花の香を おくりけるかな 遠山の 霞ながらの 春の夕風
- 3 梓弓 霞をひきて のどかなる 引くあけゆく空に 春はきにけり  
(梓弓…梓の木で造った丸木の弓にかかる枕詞)
- 4 誰もみな 春立けさを ことぶきて あゆみをはこぶ 神の広前  
(広前…神仏の御前)
- 5 ここかしこ むらむら見ゆる 白雪は 去年のかたみに 消へ残るらむ

- (むらむら…あちこちまだらなさま)
- 6 霞立つ 外山の峯に あらはれて 消残る見ゆ 去年のしら雪  
(外山…とやま 人里近い山)
- 7 若水に 舞ふ影見へて 松の上に やすらふ鶴の 初音をぞきく  
(初音…その年はじめて鳴く声)
- 8 たつどしの ゆたかはこぞに まさらまじ かりしいと田に 雪はふりけり  
(ゆたか…豊か こぞ…去年 まさらまじ…まさる いと田…細長い田)
- 9 吹きさそふ 風もつもれば 声たへて 雪にしずけき 庭の松ケ枝  
(つもれば…雪がつもる)
- 10 曙の けしきや清し 若竹に 雪つもりつゝ 年立にける  
(年立にける…新年がはじまる)
- 11 つくづくと 思えばながき 春日かな けさはつぼみの 花もひらけり
- 12 まどにさす 影もおぼろに 見ゆるかな 蓬が宿の ありあけの月  
(蓬が宿…よもぎがやど)
- 13 ものおもふ 心に空も くもるかな 見ればおぼろの 春の夜の月
- 14 さほひめの 霞の衣 おほふらん 月もおぼろに 見ゆる春の夜  
(さほひめ…春をつかさどる女神。霞にかかる枕詞)
- 15 みよしのゝ 山路に今日も 暮しけり 猶おくふかく 花をたづねて
- 16 おちこちの 山々かけて うすくこく けむるやけさの 春かすみかも
- 17 春くれば 早るわかなや 早蕨と 折々野辺に 日をくらしけり  
(早る…勇みたつ)
- 18 うらうらと かすめる野べに 思ふとき いざなひつれて 今日もくらしつ  
(うらうらと…うららかに のどかに いざなひ…つれていく さそって)
- 19 いせの海や かすみぞ吹きて 春風に まほあげてゆく 沖の釣舟  
(まほ…真帆。帆をいっぱい広げて 前に向け全面に風を受けること。また、その帆。)
- 20 名にしおふ 霞ヶ浦に あまのこが ひがたのどかに 貝ひらふみゆ  
(あま…海士。海人。海辺で魚業に従事する人。ひがた…干潟。ひらふ…ひろう。ひりふともいう。)
- 21 子の日して うえそめしより 春ごとにいろまさりゆく 軒の松ケ枝  
(子の日…子の日遊び。正月の子の日に人々が野原にでて、小松を引いて千代

- を祝い、若菜を摘んで遊宴したこと。)
- 2 2 冬かれて つれなく見えし 庭のおもの木のめ春風 のどかにぞふく  
(つれなく…すげない。何の反応もない。)
- 2 3 雪きゆる 春日の野べに もゑいでてひとつみどりに 生る若草  
(春日…はるひ。生る…はゆる。)
- 2 4 このごろの 雨に残りし 雪きゑて いつしかもゆる 野べの若草
- 2 5 賤の男に ひかれて牛も このごろは なわしろ小田を すきかえすらん  
(賤の男…まずしい男。小田…狭い田。おだ。)
- 2 6 春の日の 入江のどけき うらづたい 何あせりてか ほゆるかわうそ  
(かわうそ…川獺。イタチに似る。体長約70センチ。体は暗褐色。尾は長く扁平で約50センチ。四足短く水かきがあり、水中の魚、蛙、蟹などを捕食する。)
- 2 7 つげわたる 入相の鐘に おどろきて 帰るさいそく 桜狩かも  
(入相の鐘…暮れの鐘)
- 2 8 燈を 花にてらして 思ふとき 更るもしらで かたる春の夜  
(更ける…ふける。)
- 2 9 うかれ出て すみれつむ野の 夕暮れに 村里とうし 見ゆる燈
- 3 0 梅が香に 契り忘れぬ 鶯に ならへよかわる 人の心も  
(ならへよ…習え。さむる…冷むる。)
- 3 1 山深く 花をたづねて 谷川を 渡りてさむる 夢の浮はし  
(夢の浮橋…奈良縣吉野川の名所である夢の淵〔わた〕に渡した浮き橋。)
- 3 2 のどかなる 遠ちの眺めも かはれるは 霞のおくに かよふ春風  
(遠ち…遠方。)
- 3 3 すぎされる 去年は夢路の こゝちして また立帰る 春をむかえつ  
(去年…こぞ。)
- 3 4 あさもよひ 昨日は去年と 成りにけり今日あら玉の 春をむかえつ  
(もよひ…催ひ。その状態になる気配のあるさま。昨日…きのふ。今日…けふ。)
- 3 5 白雪の つもる梢に 咲初て ちかづく春を 告げる梅が香  
(咲初て…さきそめて。さむみ…冷むみ。冷却する。)
- 3 6 空さむみ ふるかと思れば 梓弓 やがてきゑぬる 春のあわ雪  
(梓弓…枕詞。春にかかる。あわ雪…淡雪。)
- 3 7 やよしばし 消なでつもれ 春の雪 くもゑよりちる 花とながめん

(やよ…呼びかけにいう語。くもゐ…雲居。雲。空。)

- 38 咲く花を めづるはじめや たつどしの 朝日に匂ふ 園の梅が香  
(めづる…愛づる。ほめる。)
- 39 さきぬかと 今日も山路を たづぬれば 麓ばかりに 花咲てけり
- 40 眺れば 花も霞も 月影も 昔ににたる 春の夜の月
- 41 もえ出る 草場の色も まさりけり いと静なる このめ春雨  
(いと…とても。このめ…木の芽。)
- 42 物思ふ 心もいとゞ なかりけり ふる春雨の しづかなる夜は  
(いとゞ…いっそう。)
- 43 春の野の 沢辺に生る 若草を おのが物とや 駒ぞいはゆる  
(生る…おうる。いはゆる…いなく。)
- 44 沢水の あしまづたひに 影見へて ところゑがほに いはふ春駒  
(葦間…葦の生い茂っている間。 いはふ…いなく。)
- 45 うららかに 見渡し遠き 旅人の 霞をわたる 勢田の長橋  
(うららかに…のどかに。)
- 46 朝妻や こぎゆく舟の あとたえて 霞に消る 志賀の浦波  
(朝妻…琵琶湖東岸の朝妻湊から出た渡し船による。舟にかかる枕詞。)
- 47 花さそふ 志賀の浦わの 朝風に霞を渡る 八十の舟人  
(浦わ…浦廻。いりくんだ海岸のあたり。)
- 48 佐保姫の 霞の衣 をほう哉 春の山辺は 遠く見へけり  
(をほう…覆う。)
- 49 越てゆく はこねの関は あれはてゞ 昔に似たる 春霞かも
- 50 ふじのねの かすむすがたの 水かゞみ うつる箱根の 山のみづ海  
《夏部》
- 51 高砂の 松もあらはに 今朝見えて ふかき霞も 立消てけり  
(あらはに…顕わ。まるみえ。)
- 52 馴れそめし 花の衣に ぬぎかえて 今日すゞしくも 夏は来にけり
- 53 くれゆきし 昨日の春に かわらじな 形見とやみむ 藤浪の花  
(藤浪…藤の花が風になびき動く形を波に見立てていう語。藤の花。)
- 54 夏くれど まだ色かへぬ 藤浪の 木陰はいまだ 春のゆかりか
- 55 いつのまに 夏や来ぬらむ しら浪の 卯花垣は 春をへだてて

(しら浪…卯の花にかかる枕詞。)

- 5 6 夕立の 晴て斜めの 夕日影 波路すゞしや 大浜の浦
- 5 7 花ちりて 庭の若葉の 木の間より ほのかに見ゆる 月や涼しき
- 5 8 しげりゆく 木々の若葉の 白露に やどれる月の 影の涼しき
- 5 9 なかぬ夜も なく夜もあるは 此里に まだ馴れそめぬ ほととぎすかも  
(古来、テッペンカケタカ本尊カケタカと聞きなした。)
- 6 0 烏羽玉の 暗路は遠し 卯花の ひとり末野に 暮れのこりけり  
(烏羽玉の…うばたまの。「ぬばたまの」の転。暗路にかかる。暗路…やみじ。  
末野…野原の末(野ずえ)か。)
- 6 1 風かほる 橘寺の 木の間より 山郭公 声ぞもれくる  
(山郭公…「やまほととぎす」と読むか。ほととぎす=かっこうの誤用がみられる。)
- 6 2 豊川や 山時鳥 一声を 空にのこして なきわたるらむ
- 6 3 村雨の ふる野の空の 時鳥 一声なきて かざまどりせよ  
(村雨…時々思い出したようにぱらぱら降り過ぎ、やんだかと思うとまた一しきり降る雨。かざま…風のふきやんだ間。)
- 6 4 千代こめて 小松引きにし ひくまのに 又初音きく 山時鳥  
(ひくまのに…引馬野に。昔馬市の開かれたところ。伝説が残る。)
- 6 5 時鳥 おのが五月と 深山路を いでとぎつらむ 今ぞ鳴なる  
(いでとぎつらむ…出て来たのである。)
- 6 6 待つことは やと久しきに 時鳥 只一声を 遠くきとけり
- 6 7 五月雨の 軒の雫に 音そへて 苔むす庭に 落る梅の実  
(音そへて…梅の実の落ちる音か。)
- 6 8 いつの間に 卯月の空と なりぬらん 山郭公 初音をぞきく  
(卯月…陰暦4月の異名。)
- 6 9 待わぶる 心をしるや 郭公 こよひ初音を 鳴てすぎぬる  
(待わぶる…待ちわびる。こよひ…今宵。)
- 7 0 今宵こそ まつかひありて 郭公 のきばまちかく 鳴て過ぬる  
(まつかひありて…待つ甲斐ありて のきば…軒端。)
- 7 1 この山に のがれてすめば ほととぎす おのが鳴音を 夜々に聞ぬる  
(おのが…己が。)

- 7 2 時鳥 なれが初音を 人待に 又此度も きゝ初めにけり  
 (なれが…汝が。お前が。人待に…人を待つような気持ちで。初めにけり…そめにけり。)
- 7 3 夢醒めて 見ればかひあり 小夜ふけて 涼しく出る 山のはの月  
 (かひあり…甲斐あり。小夜…さよ。さは接頭語。夜の意。山のは…山の端。)
- 7 4 しきしまの 道にいりにし 此秋は なほ待かぬる 望月のそら  
 (しきしま…敷島、磯城島、大和、日本のこと。道…和歌の道。望月…陰暦十五夜の満月。)
- 7 8 ほのかなる 影さへをしむ 三日月の 入り方ちかき 夕ぐれのそら
- 7 9 夕づく夜 おぼろかなしや 三日月の 空にみそむる 影ほのかなり  
 (夕づく夜…日没後の空をいうか。おぼろ…月がかすんで輪郭がはっきりしないようす。みそむる…見て恋慕する。)
- 8 0 立ちこめし 霞も今朝は 消へはてゝ 見渡し涼し 沖つ島山
- 8 1 春霞 消てぞしろく 見ゆる哉 真帆揚て見ゆ 沖の釣船
- 8 2 まどろみて 結ぶほどなく 明けけり みぢかき夜半の 手枕の夢  
 (まどろみて…うとうと眠ってしまい。)
- 8 3 すぎにける 世のさまさまを 見つる哉 みじかき夏の 夜半の夢路に
- 8 4 いぶせきに かえても賤か たきぬらん 夕暮ことに たてる蚊やり火  
 (いぶせき…うっとおしい。蚊やり火…夏、蚊を追いはらうためにくすぶらせる煙。かいぶし。)
- 8 5 山里は 夜な夜な月を くもらせて かやりの烟 たちそへてけり  
 (かやり…蚊を追い払うために燻らせる煙。)
- 8 6 吹きわたる 風に流れて かげうつす 澤水すゞし 蛩とぶみゆ
- 8 7 五月雨の 晴るればやがて 夕日さす 山田に賤が 早苗とる見ゆ
- 8 8 夏深き 庭のまがきに 撫子の にしきおりしく 花のいろいろ  
 (まがき…柴・竹などで目をあらく作った垣。にしきおりしく…撫子の咲くありさまを形容して。)
- 8 9 をきいでゝ 朝露むすぶ 色やみん 庭のまがきの ところ夏の花  
 (ところ夏…常夏。ナデシコの種類。春から秋まで花を開くもの。花は深紅色で葉の色も濃い。)
- 9 0 岩づたい 落る瀧つの ほとりには 夏をよそなる 秋風ぞ吹く

《秋部》

- 9 1 烏羽玉の 夜のまに秋や 立ぬらん 枕にかよふ 風ぞ身にしむ
- 9 2 きのふけふ のきばの松に 吹き告る 音羽の山の 秋の初風  
(音羽の山…枕詞。京都東山三十六峰の一つ。山腹に清水寺がある。秋の初風にかかる。)
- 9 3 のがれすむ みやまのおくも 秋きぬと身にしむ風の おどろかすらん
- 9 4 灯を 庭にかゝげて 天の川 こひこひ渡る 星に手向ん  
(天の川…枕詞。渡るにかかる。こひこひ…恋々。)
- 9 5 秋来ぬと 何より先に 告る哉 軒端にうへし 萩の上風  
(うへし…植えし。)
- 9 6 秋くれば 淋しさいとゞ 身にしみて 哀をそゆる 萩の上風  
(いとど…ますます。そゆる…添ゆる。真萩…萩の美称。)
- 9 7 ふみわけて 過ぎ行く袖も 真萩原 ゆかりにぬるゝ 花の上の風  
(ぬるゝ…袖だけでなく風もぬれる。花の上の風…花のへ(え)の風。)
- 9 8 此夕 秋風吹かば 真萩原 露もこぼれて 花もちりなん
- 9 9 眺やる その淋しさは はてもなし 物うき秋の 夕ぐれの空  
(物うき…おっくうだ。心がひかれない。)
- 1 0 0 海原や 光をしきて 照る月に 浪路さやけく うかぶしま山  
(しきて…おおう。敷く。さやけく…はっきり見える。)
- 1 0 1 吹渡る 嵐に空の 雲はれて 入江の浪に 月ぞうかべる
- 1 0 2 見るまゝに 都の友や 忍ばれん 音信たへし 月の山窓  
(音信…いんしん。山窓…山の見える窓か。)
- 1 0 3 山賤が 暮れかへるさを 伴ひて 月すみ渡る 露の柴橋  
(さ…弓矢。柴橋…柴などの雑木で造った橋。)
- 1 0 4 月読の 神の玉垣 てらしつゝ めぐみへだてぬ 影をみすらん  
(月読…つくよみ。つきよみ。月の異称。玉垣…神社の周囲の垣。みすらん…見せるのであろう。)
- 1 0 5 仰げなほ くもりなきよの 御影かな 神さびやらぬ すみのえの月  
(御影…みえい。さび…静かな落ち着いた情趣をいう。やらぬ…にやあらん。推量。すみのえ…枕詞。住江。)
- 1 0 6 鐘の音も さながら秋の 調にて 年ふる寺の 月ぞすみけり

(さながら…すっきり。)

107 雲はこぶ 秋風すごき 古寺の 庭にさやけき 夜半の月影

(さやけき…澄んでいる。清い。)

108 梓弓 矢はぎ堤に 出してみれば 月に声すむ 秋の川波

(すむ…きれいになる。物の音がさえる。)

109 照る月の 影をやどして ゆく水の 波をちらして 渡る河風

(影をやどして…川面に月の姿を映して。)

110 濁る世の さまは色々 かはれども かわらで清き 初秋の月

(かわらで…変らないのは。)

111 さやかなる 影みるまゝに 濁りたる 心も今宵 月にすみけり

(慶応4年8月13日詠むとあり。此年11月14日祖父満真歿。)

112 浮雲の はへかさなりて 夜もすがら 月影見ゆる 晴間だになし

(同月14日詠むとあり。はへ…映え。 すがら…その間ずっと。)

113 待侘し 今宵もながの 月清み いかにも眺めて いかにあかさん

(ながの月…9月の月。長月は陰暦9月の異名。)

114 長月の 月の夜ごとに かけゆくに 秋の暮ゆく 程ぞしらるゝ

115 月影は 忍ぶ昔に かわらねど さだめなき世の かはりゆくかな

(大正元年の秋なかばに詠む。)

116 今年はと まちにし秋の かひなくて 最中の月の 雲かくれしつ

(最中の月…十五夜の月。もなかの月。大正7年の8月なかばに詠む。)

117 夜やさむく なりにける哉 下窓の 壁のあれまに 虫のなくなり

118 夜もむかう 月もさやかに 影やどす あさじが原に 虫のなくなり

(あさじが原…浅茅(チガヤ)が生えている原。草深く荒れた野原の代用語。)

《冬部》

119 諸人の 仰ぐも高き 玉垣に すがすがしくも 降れるしらゆき

120 こん年も 田の実豊に ゆずり葉の まつかざりして 神に祈らむ

(ゆずりは…譲り葉。常緑高木の名。古い葉が春まであり、新しい葉が出てから落ちるのを、父子相譲るという意味にとり、年の初め、其他の吉事に飾り物として用いる。)

121 心なき 烟もしるか 誰もかも 仰ぐ宮居を さして立つらむ

122 春秋の 桜紅葉も 跡たへて 雪降りそむる みよしのゝ山

- (そむる…染むる。)
- 1 2 3 白雪や このころ嶺に 積りしか 今朝降り初むる すその村里  
(初むる…そむる。)
- 1 2 4 ふみわけて かよひし人の 跡もなし 雪降りうづむ 岡越への道  
(うづむ…埋れる。)
- 1 2 5 山里は 烟ばかりぞ みえそめて 人もかよわぬ 雪の明けぼの  
(そめて…染めて。明けぼの…夜かほのぼのと明けようとするころ。)
- 1 2 6 音さへて 浪に嵐の 吹き渡る 川瀬にむれて 千鳥なくなり  
(さへて…冴えて。千鳥…川や海の水辺に住む鳥の名。小形で群棲する。)
- 1 2 7 風渡る 音のみさゑて 河水の 氷る霜夜に 千鳥なくなり
- 1 2 8 千鳥鳴く 声に都の 夢さめて 身にしみ渡る 加茂の川風  
(加茂…京都の加茂川。)
- 1 2 9 沖つ風 更けゆくまゝに なをさえて 浦間づたひに 千鳥なくなり  
(浦間…浦廻。)
- 1 3 0 影寒み 月も浦わに かたぶきて みちくる塩に 千鳥なくなり  
(かたぶきて…かたむいて。)
- 1 3 1 降り積もる 雪を見るにも はかなけれ 春をもまたで 消へし君こそ  
(はかなけれ…原義は「量無し」。心ぼそい。)
- 1 3 2 おしむとて いかにとむべき よしもなし 草の枯野の 年も暮ゆく  
(よしもなし…方法がない。)
- 1 3 3 夕日さす 浦風寒し 難波渦 入江に芦の 冬枯れてみゆ  
(難波渦…大坂辺の渦。歌枕。)
- 1 3 4 すきまもる 夜半の嵐に 夢覚めて 聞くは板戸に 霰ふるなり  
(すきまもる…隙間漏る。)
- 1 3 5 いたづらに 月日過して 今更に 年の暮るを など惜しむらん  
(いたづらに…むだな。むなしく。など…どうして。)
- 1 3 6 父母も つれそふ妻も 皆消へて 哀れことしも 独り過ぎぬる
- 1 3 7 雪降りて 不破の関路も 昨日今日 ふきわけこゆる 人もすくなし  
(不破の関…美濃の国にあった。ふきわけ…吹き分け。)
- 1 3 8 さへ渡る 川州に立て 打羽ぶく たつやつばさの 霜払ふらむ  
(打羽ぶく…羽ばたきをする。)

- 1 3 9 浦風の さゆる霜夜の 洲崎にも 何あさりてか たつや立らん  
 (洲崎…洲が岬のように水中に突き出たところ。)
- 1 4 0 窓近く 降くる雨に さそはれて 落る木の葉の 音も寒けし
- 1 4 1 哀れなり 今日も時雨に さそはれて 果てなくちらむ 峯の紅葉は
- 1 4 2 山風に 霞みだれて さへ渡る 木曾のかけ橋 逢ふ人もなし  
 (かけ橋…けわしい崖などに掛け渡した橋。栈道。)
- 1 4 3 此頃の 雪にふす猪も 山近き 里に夜な夜な あさりきぬらし  
 (ふす…伏す。あさり…餌をもとめて。)
- 1 4 4 よりそへバ あたりハ春の ここちして 冬を忘るゝ 埋火のもと  
 (埋火…火鉢の灰に埋った炭火。)
- 1 4 5 春もやゝ 近くなりぬと 思ふるぞ 行く年かけて 匂ふ梅が香
- 1 4 6 行く年ハ をしくもあれど 春待て 雪の内より 匂ふ梅が香
- 1 4 7 埒とふ 雀友どち よぶ声も 聞は此年の 終りなりけり  
 (埒…ねぐら。どち…どうし。仲間。 此年…ことし。)
- 1 4 8 をしむとて 何国も同じ 行く年ハ ひま行く駒の 身にもとまらず  
 (ひま行く駒…隙行く駒。月日の過ぎ。去ることの速いことのたとえ。 何国…い  
 ずこ。)
- 1 4 9 名にしおふ 若の浦松 かはらねど とし波よする 身をいかにせん  
 (若の浦…和歌山市にある名勝。歌枕。 とし波よする…年齢を重ねること。)
- 1 5 0 交りを のがれて住める 庵とひて 雪も浮世の 外に降る也  
 (庵とひて…庵訪う。庵は「いほ」。)
- 1 5 1 忘れてハ 春かと思ふ 埋火の もとに忘るゝ 冬の寒けさ
- 1 5 2 渡りする 舟も稀なり きのふ今日 雪にさへたる 宇治の川つら  
 (宇治の川つら…宇治川の川面 (かわも)。)
- 1 5 3 冬くれバ 時雨をそへて 山風に 散りゆくものハ 木々の紅葉は
- 1 5 4 足引きの 山風寒く 吹きさそふ 峯も麓も 紅葉ちるらん  
 (足引きの…あしびきの。山・峰などにかかる。枕詞。)
- 1 5 5 夕されバ 霞みだれて さえまさる 枯野の道ハ 行く人もなし
- 1 5 6 霜ふかく おく榊葉に 月さへて あかぼしぶたふ 声のさやけき  
 (榊葉…神前にそなえる。あかぼし…明けの明星。金星。ぶたふ…舞蹈。昔の拝  
 礼の仕方の一つ。初め再拝して笏(しゃく)をおき、立って身を左右にひねり

などして、後に笏を取って拝し、立ってまた再拝する)

157 日にそいて 枯れゆく山の けしきにぞ 冬深くなる ほどもしらるゝ

158 岩ふるゝ 水の音だに 大井川 なをさえまさる 冬の夜半哉

(ふるゝ…震える。)

《其の他部》

159 いかにして 忍ぶところを しらせばや 見る斗りにて 言葉かわさず (恋の歌)

160 待わびて 長しと思ふ 秋の夜も 逢見しをりハ 短かりけり (恋の歌)

161 別れゆく 袖ぬらしけり 花萩の 露も我身の 涙とぞ思ふ (恋の歌)

162 我が思ふ 人は雲井の 花なれや よそにのみ見て 手にはとられず (恋の歌)

163 梅が香に 契り忘れぬ 鶯に ならへよかはる 人のこころも (恋の歌)

164 つれなきを しらで契りし 悔しさに 人をも身をも 恨みつるかな (恋の歌)

165 こぬ人も などが待たるゝ 夕べかな 松のあらしの 声を聞くにも (恋の歌)

166 山深く すめば問いくる 人もなし 杉生の門は とぢずおくとも

167 旅衣 すそ野にきても あげやらで 雲井に見ゆる 不二の芝山

(雲井…空。雲。はるか遠く離れたところ。)

168 追風に 同じみなとハ 出れども 真帆にかたほに 渡る海原

(かたほ…帆を一方に片寄らせて風を受けること。)

169 こぎ帰り 又こぎ出る 海士人は 海路やおのが すミかなるらん

(海士人…あまびと。)

170 久方の 天津ひつぎの おしへにて いや栄ゆく ことの葉の道

(久方の…天、雨、月、空など、すべて天上のものにかゝる枕詞。天津ひつぎ…天津日嗣ぎ。皇位の継承。 ことの葉の道…言の葉の道。和歌の道。)

171 千早振る 神の御世より つたへきて 今につきせぬ しきしまの道

(千早ぶる…勇ましい。はげしいの意。 神にかゝる枕詞。しきしまの道…「敷島の和歌の道」の略。)

172 あら玉の 年の初めを ことぶきて 幾世豊と 立舞にけり

(あら玉の…新玉、粗玉。年にかゝる枕詞。)

173 うたがはず 草葉にやどる 露の身の 消へにし後は みだにまかせむ

(うたがはず…疑がわず。露の身にかゝる。みだにまかせむ…弥陀にまかせん。)

174 ただたのめ 水のあわとも 消る身は 御名をとなふる 外なかりけん

(ただたのめ…ただ頼め。御名をとなふるにかゝる。)

- 175 沖つ風 ふきにけらしな 真帆揚げて 浪路はるかに 渡る舟人  
(沖つ風…沖を吹く風。)
- 176 故郷の 人に見せばや 不二のねの みほの浦廻の 浪にうつるを  
(不二のね…富士の峰。みほの浦廻…三保の入り江。)
- 177 夕されバ 庭の梢に 風立ちて しらぶる琴の 音にかよふ也
- 178 こへきつる 方に夕日の かたむけば なほしのぼるゝ 東路の旅  
(方に…方角。なおしのぼるゝ…よく遠くまでやって来たものだ。)
- 179 見渡せば 霞て遠く へだつ哉 橋田の崎の 沖の島山  
(明治22年2月22日橋田に行きてとあり。橋田は不明。)
- 180 見るまゝに いとしのぼるる 昔哉 古き瓦の のこる姿を  
(いと…ほんとうに。明治21年弥生中ばの頃、石川三碧君所蔵の古瓦譜二帖を見侍りてと有る。)
- 181 老らくの 旅路はことに ころせよ 夜ハ身にしむ 野風山風  
(明治30年5月17日帰路途中の高橋祐雄先生に遣わす。)
- 182 ながらへば 又逢ふことも あらなんと 思ひつゞけて 世をくらしぬる  
(明治30年6月11日高橋祐雄先生福島の家へ帰られると聞きて遣わしけるとあり。)
- 183 あたとふと まよひぬる身を 哀れとや かく世に出て 守るみすがた  
(明治31年弥生9日妙福寺毘沙門天の開帳に詣で侍りてとあり。)
- 184 うちよする 磯わの浪に あやなして 沖の小嶋に あしか啼く也  
(磯わ…磯廻。磯の湾曲している所。)
- 185 村雲に 月はかくれて 更ける夜の 枕にすごき 雷の声  
(村雲…急に出る雲。一群の雲。雷…いかづち。)
- 186 君が聞く 峯の松風 うらやまし 世をいとふ身の 友と思へば  
(明治33年10月27日福島縣の信夫郡岡山村の庵に住み侍る高橋祐雄先生より一首送られける返歌。)
- 187 ながらへる 薬を人に もとむより 心を煉るに しくやなからむ  
(明治42年4月中ば福島の高橋祐雄先生に「養生茶談」という著書を送られけるを謝して。)
- 188 神ならぶ 友のまとみの 小夜ふけて 鼻なくなり うぶすなの森  
(まとみ…円居、団居。車座。会合。)